武蔵野日曜聖書講筵

イサクの献供

――創世記第22章――

１９７７年3月27日
小池辰雄

後を顧みるなかれ　神汝と偕に在す　行為的信仰　「軽騎兵隊の突撃」　神を畏れ汝の独子を惜しまない　上から本ものが来るか　御霊が来ると無一物無尽蔵　我はキリストと共に

【創世記22】（私訳）

1 是等の事の後にこんな事が起こった。神はアブラハムを試して彼に言い給うた、『アブラハムよ。』彼は応えた、『はい此処(ここ)に』と。2 其処(そこ)で彼は言い給うた、『さぁ、お前の息子、お前の愛するお前の独子(ひとりご)イサクを連れ出してモリアの地に往け。其処で私がお前に告げる一つの山の上で、彼を燔祭(はんさい)として献げよ』。3 アブラハムは朝早く起きて、自分の驢馬に帯し、二人の少者(わかもの)と己が息子イサクを自分と共に連れ出し、燔祭の柴薪(たきぎ)を打ち劈(わ)り、立ち上がって神が彼に告げ給うた処へ向かった。4 三日目にアブラハムが自分の目を挙げて見ると遙かにその当たりが望まれた。5 そこで彼はその少者(わかもの)共に言った。『お前たちは此処に驢馬と一緒に残っておれ。私と子供とは往って崇拝(おがみ)をしようと思う。そしたらお前たちの処に戻って来よう』。6 其処で彼は燔祭の柴薪を取ってその息子イサクに背負わせ、己が手には火と刀を執(と)り、斯くて彼ら二人は共々に進んで行った。7 イサクがその父アブラハムに呼びかけて、『お父さん』と言った。其処で彼が『何かね、わが子よ』と答えた。すると彼が言った。『ごらんの通りです、火と柴薪とは。でも何処に燔祭の羔(こひつじ)が』。8 アブラハムは答えた。『わが子よ、燔祭の羔は神様が御自分で面倒見てくださろう』。尚も彼ら二人は相共に進んで行った。

9 やがて彼らは神が彼に告げ給うた地点に到り着いた。するとアブラハムは、其処に壇を築き柴薪を臚列(ならべ)、己が息子イサクを縛って彼を壇の上、柴薪の上に据えた。10 さて、アブラハム其の手を差し舒(の)べ、刀をおっ執り、正に其子を屠(ほふ)ろうとした。11 時にヤーヴェーの使者が天から彼に臨んで、『アブラハムよ、アブラハムよ』と言った。彼は答えた、『はい此処(ここ)に』。12 彼は言った、『その童子に汝の手を伸ばしてはならん。また彼に何事をもしてはならん。というのは、今こそ私は知ったのだ、お前が神を畏れ、汝の独子、汝の息子

を私のために惜しまぬということを』。13さて、アブラハムが自分の目を挙げて見ると、視よ後に牡綿羊がその両方の角（双角）を林叢にとらえられている。其処でアブラハムは往って其牡綿羊を執え、それを己が息子の代りに燔祭として献げた。14それでアブラハムは、この場所の名を、ヤーヴェー・イルエール（神顧み給う）と名づけた。そんなわけで、今日もなお人々は言う、その山にヤーヴェーが現われると。15それからまたヤーヴェーの使者が天からアブラハムを呼んで言うのに、16ヤーヴェーの言われることには『私は自ら誓う。即ちお前がこの事を為し、この汝の独子、汝の息子を惜しまなかったから。17その故に私は汝を祝み、汝の裔を大空の星の如く、海辺の上の沙の如く増しに増そう。しかも汝の裔は其敵の門を獲るであろう。18又汝の裔によって地の凡ての民らは諸共に恵まれよう。そは汝、私の声に聞き従ったからである』と。19斯てアブラハムは其少者の所に戻って行った。さて彼らは立ち出て偕にベエルシバを指して行った。アブラハムはベエルシバに留まった。……

●後を顧みるなかれ

アブラハムの生涯を辿っているわけなので、創世記18章までこの間やりましたが、19、20、21章と、あまり関係がないので――まぁ21章は少しありますが――22章を主題としてお話します。省いたところはどうぞ皆さん自分で読んでおいてください。創世記はとにかく親しまないといけない。

18章で有名なアブラハムと神様との問答があった。この問答は非常に大事な問答なんですが、それから19章に行きまして、ソドム、ゴモラの特にソドムが中心の記事になっていますけれども、ソドム、ゴモラの堕落した邑が神様に審かれる。審判にあう。ロトがそこから救い出される。そういうことが書いてある。ソドムとゴモラというのは、今は死海の中に入ってしまっていて分からないわけです。ちょっと読みますと、19章14節、

「14**ロト出て其女を娶る**

これは御使に示された女性です。

婿等に告げて言いけるはエホバが邑を滅したもうべければ　爾等起ちて此処（ソドム）を出よと然ど婿等は之を戯言と視為り」（**創世記19・14**）

と書いてありますが、まぁこれは御自分でお読みください。17節に行きまして、

「17**既に之を導き出して其一人曰いけるは　逃遁て汝の生命を救え　後を回顧るなかれ　低地の中に止るなかれ　山に遁れよ　否ずば爾滅ぼされん**」（**創世記19・17**）

「後を回顧るなかれ」というこの言葉が非常に大事な言葉です。キリストが、

「**鋤に手をおいて後を顧みる者は我にふさわしからず**」

と言われた。即ち福音の世界に入ってきて、そして福音ならざるものに引かれたら、それは福音には相応しくない。出エジプト時代の「肉の鍋」を慕って、「この曠野の生活は苦しい」と言ってモーセにつぶやいたですね。ずっと後の話ですが。これも「後を顧みる」というのと同じことです。福音のことに限らず、何でも志を立てて打ち込んで行ったら、もうそのことに自分を、全存在をぶちまけて行くのが本当の在り方です。分裂することはダメです。分裂、疑い、恐れ、みんなこれはダメ。ドイツ語で「疑う」という字は「ツヴァイフェルン」〔zweifeln〕といって、「二つに割れる」という言葉です。

ところが、ロトの妻は後を顧みてしまった。そうしたらば、「塩の柱になってしまった」と書いてある。不思議なことが書いてある。19章26節。この審きには「硫黄と火が降ってくる」というようなことが書いてありますね。これは黙示録にも書いてある。火山的な現象です。

「[26]**ロトの妻は後を回顧たれば塩の柱となりぬ**」

「塩の柱」というのはどういう現象だか知りません。けれども、とにかく人間ではなくなったわけです。あそこらは岩塩が多い。だから、もし泥なら泥になってしまったというのと同じことで、そこらの塩と同じことになってしまったというわけです。

神様のことに携わりながら、何だかんだと心が分裂しては――相対的なものを支配していくならいいですよ――ところが、相対的なものに支配されることなんです、この「後を顧みる」ということは。そこらが著しい言葉です。

●神汝と偕に在す

その次にモアブとアンモニ人のことが書いてあります。ここにはちょっと妙なことが書いてありますので、ここでは読まないことにしておきましょう。自分で読んでおいてください。まぁ旧約には、人間のあらゆる現実がそのまま暴露されているように書いてある。

「こんなことがあったんですか」

なんて思うようなことが書いてある。大体、モアブだとかベニヤミンという、こういう言葉がその事実を含んだような言葉なんです。「モアブ」は「ミアブ」という言葉から来るので、「父から」という言葉です。内容は読んでください。

20章に行きまして、今度はアビメレクとサラのことが書いてある。それから21章に行って、今度はイサクの誕生のこと。ちょっとこれは読んでおきましょう。

[1]エホバ其言いし如くサラを眷顧みたもう

遂にサラは孕んで、これはヘブル書の11章には、サラの信仰の結果であるようなことが書いてありますが。

[2]サラ遂に孕み神のアブラハムに語たまいし期日に及びて年老たるアブラハムに男子を生めり

アブラハムが100歳で、サラは90歳位です。そこで、

3 **アブラハム其生まれたる子即ちサラが己に生める子の名をイサクと名けたり**

「イサク」というのは「笑い」という、「人が笑う」という字です。自分も笑ったんです。

「そんな私から子供が生まれるでしょうか？」

と言って、いっぺん笑ったんです。その笑いが、今度は本当の喜びの笑いに変わるわけですけれども。イサクの生まれた時は、アブラハムは100歳だと書いてある。そこに、

6 **サラ言いけるは神我を笑わしめたもう 聞く者皆我とともに笑わん**

今度はイサクのことが少し書いてある。イシマエルはサラの侍女の子ですから、アブラハムの正妻の子ではない。

12 **神アブラハムに言いたまいけるは 童兒のため又汝の婢のために之を憂うるなかれ サラが汝に言うところの言は 悉く之を聽け 其はイサクより出る者汝の裔と称えらるべければなり**

と。それでイシマエルは侍女であるお母さんのハガルと一緒に追い出されてしまった。そのところはまた非常に劇的に書いてある。14節からずっと。けれども、神様は決してハガルを顧みないわけではないので、17節、

17 **神其童兒の声を聞きたもう神の使即ち天よりハガルを呼びて之に言いけるは ハガルよ何事ぞや 懼るるなかれ 神彼処におる童兒の声を聞きたまえり**

これは天使の声だね。

19 **神ハガルの目を開きたまいければ 水の井あるを見 ゆきて革嚢に水を充し 童兒に飲ましめたり**

とにかく、イスラエルの方は曠野が多いですから、水が本当に大事なんです。

20 **神童兒と偕に在す 彼遂に成長り曠野に居りて 射者となり**

これが後にアーチェリーが上手な射手となったということが書いてある。

22 **当時アビメレクと其軍勢の長ピコル、アブラハムに語りて言いけるは汝何事を為すにも神汝とともに在す**

はい、これは大事な言葉です。

「何事をしても神様は汝とともに」

という。逆に言うと。

「神が汝と偕に在すから何事もできる」

と、何をしてもいいんだ。「神様が一緒にいらっしゃれば何をしてもいい」とは、「勝手なことをしてもいい」ということではないですよ。神様がいらっしゃる処には、することがみな神的な角度になるから、何でもできるということになるわけです。

ドイツの金貨に、「ゴット ミット ウンス」(Gott mit uns)、「神われらと偕に」と金貨の縁に彫ってある。そういうところを見ても違うんですよ、これは20マルク金貨だったかね、１８８８年の。これは歴史的年号なんです〔独帝ヴィルヘルム1世死去、独帝フリードリヒ3世

死去、ヴィルヘルム2世即位，年に二回皇帝が代わったことから「三皇帝年」と言われる。（ウィキペデアより）。

「神汝と偕に在す」

という。ヒルティさんもしきりにこの「偕に在す」ということを書いています。「神われらと偕に」「インマヌエル」というのはキリストの名前だから。「イン」は偕に、「ヌー」は我ら、「エール」は神。私たちにおいては、「神われらと偕に」は、

「キリストわれらと偕に」

です。31節に「ベエルシバの誓い」というのがありましてね、こういうところは非常に牧歌的な記事ですから、読んでおもしろいですよ。

●行為的信仰

それでは、今日は22章に行きます。大事な章ですから。私は実はこれを訳したのがある。自分の訳を読みます。

1是等の事の後にこんな事が起こった。神はアブラハムを試して彼に言い給うた、『アブラハムよ』。彼は応えた、『はい此処に』と。2其処で彼は言い給うた、『さぁ、お前の息子、お前の愛するお前の独子イサクを連れ出してモリアの地に往け。其処で私がお前に告げる一つの山の上で、彼を燔祭として献げよ』。

生贄だよな。遊牧の民ですから羊や何かを焼くんです、犠牲的に。それと同じようなことをイサクにしろと。残酷な話だ。

3アブラハムは朝早く起きて、自分の驢馬に帯し、二人の少者と己が息子イサクを自分と共に連れ出し、燔祭の柴薪を打ち劈り、立ち上がって神が彼に告げ給うた処へ向かった。4三日目にアブラハムが自分の目を挙げて見ると遙かにその当たりが望まれた。5そこで彼はその少者共に言った。『お前たちは此処に驢馬と一緒に残っておれ。私と子供とは往って崇拝をしようと思う。そしたらお前たちの処に戻って来よう』。

二人の少者だから全部で四人だね、自分の息子と。そこで大事なことは、神様は、

「お前の息子、お前の愛する、お前の独子」

と、たたみかけて「汝」という言葉が書いてある。非常に強く。汝の息子、しかもそれは汝の愛する、汝の独子と。一人息子ですよこれ。この一人息子のイサクから空の星の如き子々孫々ができると約束しているんです、創世記15章で。その約束の子供です。その約束の子供を献げよなんて、こんな理不尽な、訳の分からない命令はないわけですよ。普通ならもう、1000人の中の999人までが「なぜですか？」と聞きたいわけです。

「神さま、これは約束の子ではないですか！　しかも、もう子供ができないと思っ

たサラから、たった一人出てきたのに、それを献げろとは何事ですか!?」と。神様を恨んだり、疑ったり、とにかく必ず反問する、問い返すわけだ。ところがどうですか。アブラハムは朝早く起きて、自分の驢馬に帯して、返事もしない。返事は彼にとってこの場合、行為であった。実行に移った。神様の言う通りに実行に移った。それが彼の「はい」であった。

こういう行為的信仰、これが一番信仰の深いものです。言葉でもって、ただ心でもって――心・言・行という――心の内ではもちろん「はい」と言っていたのでしょう。外には言わない。心では分からないけれども、自分の判断、理性、頭、それをみんな乗り越えてしまった。超でも否定でもいい。それを否定し、それを乗り越えている。そして神様の命令を、言葉を百%に受けとって行動に移った。これが素晴らしいところです。ここのところの行間にそれが語られているわけです。行間にそれが現われている。

●「軽騎兵隊の突撃」

クリミヤ戦争で、イギリスの軍がロシヤと戦った時に、"The Charge of the Light Bri-gade"「軽騎兵隊の突撃」というテニスンの詩がある。

"Forward, the Light Brigade!"　「進め 軽騎兵隊」の号令に
Was there a man dismayed?　うろたえるものなどどこにいよう
Not though the soldier knew　誰かの失態あったとしても
Someone had blundered.　うろたえるものなどいはしない
Theirs not to make reply,　返事は不要
Theirs not to reason why,　理由も不要
Theirs but to do and die .　ただ 粛々と死に行くのみ
Into the valley of Death　死の谷へ 粛々と
Rode the six hundred.　進み行くは六百騎　（中島久代訳）

前進せよ、軽騎兵隊よ!
誰かが躓いたということを知らないわけではなかった。
返答することは彼らの心でも、する事でもなかった。
なぜと理由づけることも彼らのことではなかった。
彼らの為すところのものはただ成して且つ死ぬのみ。
死の谷の中へと六百の騎兵隊は突撃して行った。

上官の命令が「突撃しろ!」と言ったんです。その谷へ向かって突撃しろということは、もう死を意味する。それくらい無謀な命令なんです。けれども、

「なぜここに突撃しろと言われるか?」

と言って、反問もしなければ、また理由づけもしない。ただ命令のままに突撃して行って戦死した。死の谷に向かって、中へと突撃した。これが

「ノットトゥーリーズン ホワイ」（not to reason why）

ということ。昔の日本の軍隊がなぜ強かったかというと、

「上官の命令は天皇陛下の命令とせよ」

と。天皇陛下の命令は絶対なんです。だから、突撃して行って、「天皇陛下、万才！」と言って戦死したんだ、昔の人は。決死隊となった。必死隊なんだ。「死を覚悟して」というのは決死隊だけれど、もう一つ、必死隊。戦艦に魚雷をもって突撃して行ったね。第二次戦争の終りの頃、あの特攻隊というのはみんな必死隊なんです。全身もろとも魚雷と共に爆発するわけです、戦艦に向かって。昔の青年というのはとにかく――戦争の善し悪しはともかくも――そういう面魂（つらだましい）があった。今はどうだか知らんけれどもね。これは、

Theirs but to do and die.（ただ成して且つ死ぬのみ）

ということ。

「神を信ずる」というのは御利益（ごりやく）ではない。神は神なるが故に、自分の側の判断ではない。これに全存在を投げかけていく。そこに信の本当の姿がある。必ず力が来ます。力の無い信なんて信仰ではない。上から力が来るから。だから、

「汝の息子、汝の愛する、汝の独子」

と、特に力強く三回、「汝の」が書いてありますが、私はそのまま訳した。しかも、

「約束の子、独子を献げよ、燔祭とせよ」

と。これは正に、

「ノットトゥー リーズン ホワイ」（not to reason why）

だね、「何故か」「ホワイ」と言いたいんだけれども、これは、

not to reason why,　〔なぜと問うこともなく

but to do and kill.　ただ行って屠るのみ〕

だね。それで、驢馬に帯して、少者二人を連れて三日路を歩いて行った。そこでその二点が非常に大事なことです。黙って受けとってやることが本当の信です。

●神を畏れ汝の独子を惜しまない

6 **其処で彼は燔祭の柴薪（たきぎ）を取ってその息子イサクに背負わせ、己が手には火と刀を執（と）り、斯くて彼ら二人は共々に進んで行った。**

聖火だね、聖なる火だ。他の従者はそこに置いて、イサクと二人で。

7 **イサクがその父アブラハムに呼びかけて、『お父さん』と言った。其処で彼が『何かね、わが子よ』と答えた。**

「何かね、わが子よ」と言う。日本語では「わが子よ」と普通言わない。「イサクよ」と言う

けどね、こういう場合は。原文では「わが子よ」と書いてある。

すると彼が言った。『ごらんの通りです、火と柴薪とは。でも何処に燔祭の羔（こひつじ）は？』。

そう聞いたんだね、息子は。

8アブラハムは答えた。『わが子よ、燔祭の羔は神様が御自分で面倒見てくださろう』。尚も彼ら二人は相共に進んで行った。

仕方がないからアブラハムはそう答えた。

9やがて彼らは神が彼に告げ給うた地点に到り着いた。するとアブラハムは、其処に壇を築き柴薪を臚列（なら）べ、己が息子イサクを縛って彼を壇の上、柴薪の上に据えた。10さて、アブラハム其の手を差し舒（の）べ、刀をおっ執り、正に其子を屠（ほふ）ろうとした。

有名なレンブラントの絵があります。その実画を、レンブラント展が東京で開かれた時に私は観たけれども、じっと、その所から立ち去り難かったね。

11時にヤーヴェーの使者が天から彼に臨んで、『アブラハムよ、アブラハムよ』と言った。彼は答えた、『はい此処（ここ）に』。12彼は言った、『その童子に汝の手を伸ばしてはならん。また彼に何事をもしてはならん。というのは、今こそ私は知ったのだ、お前が神を畏れ、汝の独子、汝の息子を私のために惜しまぬということを』。

はい、この節がまた大事な節です、12節。これは直訳すると、

「汝の独子を私から守り押さえておく」

こちらで押さえて、そちらに出さない。そういうようなことをしないこと、それが「惜しまない」という訳になりますけれども。「汝が神を畏れる」、畏神ということ。ビスマルクの言葉にこういうのがある。有名な演説の終りの方に出てくる言葉です。

「我々ドイツ人は神を畏れる。この世界においては何者をも恐れない」

力強い言葉だね。ビスマルクも、イギリスのグラッドストーンも、必ず聖書を読んでいました、どういう時にも。教会に行くとか、行かないとか、そんなことではない。日常の生活で本当に聖書を喰（くら）っていた。読むのではなく、食べていた。

「わが言は霊なり生命なり」

と。キリストは、「私の言葉は意味だ」なんておっしゃらない。

「霊であるぞ、生命であるぞ」

と。だから、霊として、生命として、直ちに全存在で受けとらないことには。聖書は読む本ではない。聖書は今、「食う」と言った。またある意味において「聞く」という。語りかけているんです、私たちに二人称で。一人称、二人称の間柄です。三人称でもって、「何が書いてあるか」と読むなんて、そんなものではない。語りかけてくる聖書を聞かなくては

いかん。神の言は読む言葉ではなくて聞く言葉です。マルティン・ルッターがそのことを既に言っている。あれほど聖書を重んじたルッターは、決して文字にとらわれていない。聖書の人ルッターだけれども。「聖書の人ルッター」なんていうと、その言葉がまた躓きになる。「聖書の人」というと、ただ文字ばかり問題にしているかというと、そうではない。

「聖書は、こんなものはかけらだ」

というようなことを言っているよ、ルッターは。神様は無限だから、聖書はその一端に過ぎないかけらだと。愉快だね。あなた方もそういう魂にならなければダメだよ。

●上から本ものが来るか

神様を畏れて、神様の言葉を百%に受けて、独子をも問題にしない。いや、人間的には、子供を屠るなんていうことは、自殺するよりか辛いかも知れない、親にとっては。人間的にいってもそうだし、それから、

「ちゃんと神様が約束しているのに、その約束を破るようなことを言っているのは一体何ごとか」

と。当然な疑問になるわけだ。まぁだんだん人生経つとわかるけれども、もう現実なんていうのは矛盾だらけです。やむを得ざる悪と、いろんなものがゴタゴタしている。正にドラマだ、人生は。どんな偉大なシェイクスピアといえども、現実のドラマにはかなわない。シェイクスピアが書いたドラマは、文学としては素晴らしいけれども、人生そのもののドラマはもっと凄い。ダンテの地獄も凄いけれども、現実はもっと凄い地獄がある。だから、歴史も、聖書も、神様のオラトリオ、神劇なんです。

「この闇の世界を光の世界に変えてやろう、救い上げてやろう」

という大ドラマ、多次元的なドラマです。けれどもこれは、このままにならない。これは聖書が預言している通り、この世界はいつか滅びる。大きなカタストローフが来てから、それからの話、黙示録に示されている通り。

「それでは、私は勝手にしようか。いや、そうじゃない。だからこそ、いよいよ本当の生き方をせよ」

とパウロも言っているわけです。

「地上に望みがなければないほど、いよいよ天的な望みに生きろ」

と。希望というのはこっちからの希望ではないんだから。

アブラハムは自分のイサクに対する希望を捨てた。けれども今度は、現実に行き詰まらしめられた。絶壁に来てしまった。絶してしまった。現実に絶すると、今度は豁然として次の世界が開けてくる。

いいですか。いろんなことがあるね。これからの日本は、なかなか現実は厳しいよな。けれども、どんなに行き詰まっても、本当にキリストの生命を生命として生きるならば、

絶対に行き詰まりを知らんことになります。それだけの不思議なことが起きてきますから。不思議といったって、ただ不思議を望んでいるんじゃないけれども。私の藤井先生が、

「真理のためには死んだっていいじゃないか」

と言った。先生はよく「真理」という言葉を使ったけれども、本当は「福音」だよな。そこまでの気持をもって先生はやっぱり生きていた。先生が死んだ時は、財布の中は空っぽだよ。先生の著作集が今度は子供を救ったという。まぁ藤井先生はそういう人でした。

アブラハムが神様を百%に受けとった。本当に御霊の力が、生命が来ると、お腹の空いていたのも忘れてしまう、水だけ飲んでいればいい。まぁそんなようなもんだよ。とにかく、自在なことになります。自己の本質を偽ってはいけない。自己の本質に即する時には、神様はどんな患難をも突破させてくださいます。

ところが、茄子(なす)が胡瓜(きゅうり)になろうとしたって胡瓜にはならないよ。胡瓜が茄子になろうとしたってならない。胡瓜は胡瓜、茄子は茄子。バラはバラ。人をうらやむことは一つもない。人真似はひとつも要らん。ただ問題は、

「上から本もの〔聖霊〕が来ているか」

と、この一点だけです。三角であろうと、丸であろうと、何であろうといい。個というものはそれだけ掛け替えのない絶対性を持っている。これはみんな光を放つ、香りを放つ、色を放つ。それでこれが大きなハーモニー、大きな調和となる。

だから、国だってそうですよ。それぞれの国の特性を大いに持っていればいい。そして、本当に人間性を持って、お互いに握手したらいいじゃないですか。なぜ喧嘩するんですか。御霊が本当に来れば、そういう相対的な判断は突き抜けてしまう。何々主義だとか、何々教派だとか、仏教の人であろうと、何であろうと、一向差支えない。私は、相手がインチキでなければ、楽でしょうがないです、気持が。何もこっちで構える必要がないからね。

ところが、何とか主義は私をアウトサイダーにしている。気の毒になってしまう。自分の信仰というものを持っているから。「わが信仰」なんて言って、信仰をエトバス〔何ものか〕にしているから。

信仰なんてありませんよ、私はなんにも。ただ「キリストの信」が入って来ますから、これはもう千変万化して現われてくる。物凄い力を持っている。あなた方は大分そういう気持がわかって――「わかる」といったって頭ではないですよ――存在的に受けとって来たでしょ。これは何としても伝えなければならない。神学も組織神学じゃない。ドラマティックなものです。

●御霊が来ると無一物無尽蔵

13 **さて、アブラハムが自分の目を挙げて見ると、視よ後に牡綿羊(おひつじ)がその両方の角（双角）を林叢(やぶ)にとらえられている。其処でアブラハムは往って其牡綿**

羊を執え、それを己が息子の代りに燔祭として献げた。14**それでアブラハムは、この場所の名を、ヤーヴェー・イルエール（神顧み給う）と名づけた。**

「ヤーヴェー・イルエール」「神顧み給う」の「イルエール」というのは「ラーアー」という字からくる。「ラーアー」という字は「見る」という字です。だから、「ローエー」というと――現在分詞の名詞的用法ですが――「見る者、先見者」なんていうことになる。「ローエー」というと、預言者みたいに、本当に見る者。ドイツの詩人ゲーテなんて、正に「ローエー」という人だね、物の本質をぐっと見るような。

そんなわけで、今日もなお人々は言う、その山にヤーヴェーが現われると。

15**それからまたヤーヴェーの使者が天からアブラハムを呼んで言うのに、**16**ヤーヴェーの言われることには『私は自ら誓う。即ちお前がこの事を為し、この汝の独子、汝の息子を惜しまなかったから。**17**その故に私は汝を祝み、汝の裔を大空の星の如く、海辺の上の沙の如く増しに増そう。**

そういう強い表現なんです、ヘブライ語の動詞の使い方が。

しかも汝の裔は其敵の門を獲るであろう。18**又汝の裔によって地の凡ての民らは諸共に恵まれよう。そは汝、私の声に聞き従ったからである』と。**19**斯てアブラハムは其少者の所に戻って行った。さて彼らは立ち出て偕にベエルシバを指して行った。アブラハムはベエルシバに留まった。**

アブラハムがイサクを、その愛する独子を献げる。神様はそれからずっと後で、神様自身が、その愛する独子を屠った。十字架で。これはキリストです。独子は、「ただ一つの者」。この「ただ一つ」

というのは非常に大事なことなんです、人でも物でも。

私が持っているいろんなもので、ただ一つのものは聖書だね。そのただ一つのものも地上から次の世界に持って往くわけにいかん。私はこの地上を去る時に、

「聖書だけは持たしてもらおう」

なんていったって、そうはいかん。聖書を持って往くわけにいかん。全く無一物になってしまう。もうはっきりわかっているんだから。

「私はこの聖書を持って向こうの世界で読みますよ」

と、世界中、何億の人が言っても、それはできない。誰でもが地上を去ってその次の世界へは、去る時は無一物で往く、どんな金持ちも、どんな物持ちも。だから、その無一物の現実を既に地上において持っていなければ、この現実を現実としていなければ、本当の生き方はできないということになる。

ところが、無一物になると、これは不思議なことに無尽蔵になる。

「無一物無尽蔵」

というのは禅宗の言葉だよ。さすがに、禅宗の坊さんだ。パウロもちゃんと言っている。

「キリストを持つ者は万物を持つ」と。無一物というのは、どうしてなれるか。今、私が既に言った、「キリストをもつ」ことです。キリストだけ、これが「ただ一人の者」「デァ　アインツィゲ」(Der Einzige)です。我々にとってはキリストは「ただ一人の者」。天上天下、キリストの他にわが要する者なしという。究極において。これは詩篇73に書いてある。

「天の上にも天の下にも、あなたの他に慕うものはない」

と。旧約では神さまのことだよな。新約ではこのキリスト。「キリストを持つ」ということをもう少し具体的に言うと、どういうことですか。

「キリストの御霊を持つ、御霊を頂くこと。聖霊には換えられませんよ」

と私は言っている。私から聖霊を取ったら、人間小池は屑みたいなもんです。聖霊があるからこの八方破れが生きているんですよ。

「義人なし一人だになし」

と、パウロが言っている通り。私は、整っているようなのは大嫌いなんだ。在るがままがいい。キリストが一番嫌ったのは偽善者だ。

「偽善なる学者、パリサイ人よ」

という。この御霊があれば、これは既に無尽蔵なんです。無尽蔵だから他のものが、

「あれども無きが如く、無けれども有るが如し」

とパウロが言った、あの心境はみんなそうなんです。パウロさんの言葉だって、楽に読めてしまう、「ああその通り、その通り」と。御霊がくると、無一物無尽蔵です。

「さぁ、そこまで悟るのは大変だなぁ」

なんて。悟らなくたっていいよ。キリストの御霊が来れば自然にそういう気持になってしまうから。

●我はキリストと共に

みんな神有(しんゆう)です。すべて神の有(もの)です。私有、共有とは相対的現実では、有りますよ。これはみんな一緒の公共のものです。こういう公共物をいい加減にして、私有ばっかり大事にするようなケチクサイ根性がある。私有も共有も、本当は神様のものである。神有です。「これは私が作ったもの」というものが一つでもありますか。自分自身が造られた者だよ、神様に。神様は大芸術家である。生ける物を造る者は神様の他にいないではないですか。

そういうわけで、この独子を、ただ一つの独子キリストを十字架にかけられた。それは、この独子を通して万人を救わんがためでありました。我執にとらわれているその罪を全部贖わんがためにキリストを十字架にかけた。パウロが言った、

「我はキリストと共に十字架せられたり。最早(もはや)われ生くるに非ず、キリストわが内に在りて生き給うなり」（ガラテヤ2・20）

と。ですから、アブラハムが独子を献げたその気持において、神様は自分の気持をちゃんと見ておられた。やがて自分は、独子キリストを屠ると。

「お前はイサクを屠らなくていいよ。私が屠（ほふ）るよ、私の独子を。これは万人を救済せんがために」

と。イサクを屠ったって救済にはならない。イサクはやっぱり生かしてやらなくては、約束の子だから。けれども、アブラハムをして、その胸つき八丁の信仰の土壇場に立たした。彼は本当に神を信じた。この独子をとうとう神様に献げた。「ダス　アインツィゲ」（Das Einzige）、「ただ一つのもの」。「これは」というものがみんなあるんだね。

「これはと思うものを献げよ」

ということです。「これは」と思うものは、最後は何ですか。実は自分自身なんです。皆さん、私の才能、私の芸術、みんなそれぞれ「これは」という特色があるかも知れません。けれども、実はそれにおいて、その主体であるところの自分自身を神様に献げる。今度はイサクではない。自分自身を神様に献げる。そうすると、この「ダス　アインツィゲ」〔ただ一つのこと〕は、「デァ　アインツィゲ」〔ただ一人の者〕として、今度は自分自身を、神様が掛け替えのないものとしてお使いになる。ひとりびとりを。だから、あなた方は天下一品だと言うんです。人をうらやむことはない。みんなそれぞれ天下一品です。

「これは」と思うものを神様に献げる。「これは」と思うものにおいて自分を献げると、今度は「これは」と思うものを通して神様は大いにその人を使い給うということ。人の目にはどう見えようと一向に差支えない。「献げる」というと、何か偉そうだけれども。もう一つ砕いて言うと、投げ出すんです。自分を投げ出す、捨てる。

「キリストの中に自分を捨てる」

捨身というのはその事なんです。

「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

なんていうけれどもね、本当に浮かんでしまうよ、今度は。何でもそうなんですから。「献げる」なんて言わなくたっていいよ、もったいぶって。捨てればいいんだ、自分を。捨身です。こんな楽なことはないじゃないですか。何かしようというんじゃなくて、捨てろという、自分自身を。そうすると「無即無限無量」のことになってくる。

自分なんて問題にしない無の世界。無は虚無ではない。私心の無いことです、無私。そうしたらば、私の無い在り方を最も表わしたのがこのキリストなので、申し上げている通り。だからキリストの無私を頂く。虫のいいことであります。そういうわけです。キリストの十字架という贖いを頂きまして、無私とされております。だから、力が来るんです。これが本当の福音です。主義でも何でもない。聖書解釈でも何でもないです。はい、終ります。